館報

No. 3　1975. 11

大阪外国語大学附属図書館

図書館施設計画作成にあたって直面するいくつかの問題点

芝　池　靖　夫

わたくしはさる7月から，前任者黒木義典教授の任期満了のあとをうけて，しばらく当附属図書館をおあずかりすることになりました。よろしくおねがい申しあげます。

わたくしども館員にとって，当面最大の任務はいうまでもなく大学移転にともなうあたらしい図書館の施設計画案をつくりあげることにあります。実はそうした作業はすでに前任者の時代からはじめられているのでありますが，この機会に，その間にうかびあがってきたいくつかの重要な問題点をみなさんにご紹介申しあげ，もっていっそうのご理解とご鞭撻の資に供したいとおもう次第であります。

1．各大学附属図書館における“専門化”指向の必然性
＝大学間ネット・ワーク・システム確立の不可避性

どなたもよくご承知のように，この数年来わがくにで生産され，あるいは流通する図書文献その他のいわゆる“情報”諸資料の数量的増大テンポはまことにすさまじいものがあります。それに反して，こうした状況に直接対処する場としての大学図書館側のステータス，つまり人員・設備および財政等の規模は実際上，終始固定したままであります。こうしたふたつの条件の背離という事態にわれわれとしてはいったいどう対処したらよいのか。基本的には，やはりくにの文教政策の転換をもとめるのが第一でありましょう。しかし，それだけですべてが解決するわけでもなさそうであります。図書館自体のがわでもやはり図書資料等の選択の精密化，収納の機動化等をいっそう効果的に促進していかなければならぬはずです。それはけっして“自己規制”などというケチなものではなく，むしろ“時代との照応”とでもいうべきものとかんがえられます。

各大学附属図書館の“専門性”と“総合性”とのバランスの問題はたしかにむつかしい問題にちがいありません。しかし，それらの図書館の蔵書内容が各大学または学部の専門分野に応じてともあれ一定の specialization をとげてきていることは否定すべくもない事実といえます。おもうに，京阪神地区という比較的せまい地域内に十も二十もの大学の附属図書館がそれぞれ相互に無関係なかたちで，閉鎖的に機能しているという現状は，よくかんがえてみますと一つまり，たとえそれぞれの大学内部でいかに図書館が繁昌しているといったところで，全蔵書の利用率という点からみるならば，ずいぶんもったいない一面があるわけです。特定地域内に竝存する各大学附属図書館間での，さらには一部公共図書館をもくみこんだかたちでの，図書資料等の一定の相互利用関係＝いわゆる「ネット・ワーク・システム」の確立については，海外先進地域ではすでに着々現実化しつつあるようですが，わがくにでももはやそれは時間の問題といってよさそうであります。各大学図書館の“専門性”と“総合性”のバランス問題なるものは，じつはそうした趨勢をふまえた上で，もういちどあらためて検討しなおされるべきでありましょう。あえていうならば，この“情報氾濫時代”にあって，各大学図書館としてはやはりそれぞれ一定の“専門化”をつよめていくのが必然の方向であろうかとおもうのであります。

2．図書館のコンピュータ・システム化，機械化

上述のような特定地域内に竝存する大学図書館でのネット・ワーク問題は，じつは従来からも蔵書目録の相互交換ないし図書資料等の研究者個人による借出利用というかたちでほそぼそながらすでに実現をみているものであります。しかし，そうした相互利用関係も，今後は各大学図書館のカード検索過程を統一的にコンピュータ・システム化することによって飛躍的に効率化しうるはずということができます。つまり，それによってめあての本や論文がどこの大学にあるのか，さらにはそれらが現在貸出中なのか否かま

でをもふくめて，即時にチェックできるようになるはずであり，「相互利用」もそこまでいかなければまともとはいえないのであります。

このようにみてまいりますと，図書館の各種図書資料等の収蔵施設の近代化＝機械化もまた吃緊の課題ということになりましょう。館員が，――たとえ全開架制になったところで，教師や学生たち自身が――借出し伝票を片手に書庫内をあちこちさがしまわるやりかたはあきらかにもはや過去のものというべきであります。前述の検索過程のコンピュータ化は当然資料収蔵施設とも機械的に連動されるべきでありまして，つまり，めあての資料がたとえどこの大学の図書館の書庫内にあろうとも，ただちにその資料を中心とする一定範囲（部数）の関連資料とともにワン・パッケージになって書架横列のなかから一歩まえにせりだし，容易に検索者の眼にとまるようになされるべきだということであります。

3．視聴覚施設の拡大延伸

紙幅の余裕がなくなってきましたが，最後にもうひとつだけ……。本学の場合，移転にともなうＬＬ施設の飛躍的な改善（その場合，従来のオープン・リール方式からカセット方式への転換をもふくめて）はもとよりいうまでもありません。さらになお，これを単にＬＬ教室だけの改善強化問題としてとらえるのではなく，もっと範囲をひろげて，各語学系研究室はじめ，中小規模の教室や一部演習室にまでも一定程度の録音再生装置を固定させることが望ましいとかんがえます。それをどの程度のものにするのが適適当⇦当かという点についてはなお検討の余地がありますが，ただ一般の人文社会系の大学にみられるような，教室といえば黒板（これ自体もずいぶん古典的なしろものですが…）と机と腰かけだけで十分といった通念はすくなくとも本学にはあてはまらないことだけはたしかといえるでありましょう。

む す び

以上はけっして単なる夢物語りをいっているのではありません。とりわけ，上述の**1**ないし**2**の諸課題については，例えばすでに本学と大阪大学との両附属図書館のあいだでよりよい効果を求めて予備的な話しあいをすすめております。（世上の技術的成果としては，すでに関連諸企業においていろんなタイプのものが開発されているようです。）その場合，難点は例によって(!)ただひとつ，，，費用の問題だけであります。

みなさんがたの積極的なご批判とご教示を切に希求してやみません。

（館長，中国語学科教授）

任期満了に当って

黒　木　義　典

7月15日付で2年間の図書館長併任が終りました。ずい分長いようで，しかし実績は全く貧弱でしたが，やはり任期満了で重荷を下したという感じは否定できません。

館長というものは専門職の中の唯1人の素人みたいなもので，専門家がどうかすると見落としやすい点を見るのがひとつの任務ではないかと考えていますが，怠け者のわたくしには何もできないうちに時が過ぎてしまいました。

たとえばある1冊の本を借り出したい人にとって，具体的な意味を持つ本はその1冊だけで，他の何万，何十万の本は無に等しいわけです。しかし図書館の側からいえば，それは何十万冊の中の1冊でしかないわけです。素人であり，偶時的にしか図書とかかわりを持たない利用者と，毎日を図書と共に生活している職員との考え方の違いは当然に出てくるのです。専門家とは素人にできないことを，素人にもわかる方法で実施する人でなければならないというのがわたしの持論で，図書館の立場もそのように理解したつもりですが，形に表われるまでには至らなかったようです。

国立大学の場合，本も国有財産ですから当然に厳重な管理が要求されます。蔵書趣味も，その財力もないわたしは，職業に直接関係のある本以外はほとんど買わず，買っても読んだ後は捨てるのが普通になっています。本当は大学図書館でも，貴重本，稀覯本以外は適当な時期に廃棄すべきだと思いますし，台帳とかカードとかの手続きも，そして分類も廃止すべきだとも考えます。しかしそれはできないことなのです。わたしのこの乱暴な意見に個人的に賛成する人は多いのですが，実行は不可能です。

そういうわけで，わたし個人は，大学図書館の主たる任務は読まれる本を提供することにあると考えていましたし，いまでも考えていますが，もちろんそれだからといって，貴重本が存在することは不必要だなどとは思いません。石浜文庫については前号で紹介された通りで，このような貴重な図書があることによって，一般書の利用度も高まるものと考えます。なおこの文庫以外にも，相当の貴重書があります。うかつにもわたし自身最近まで知らなかったことですが，古いモンゴルの経本は世界でも珍らしい貴重なも

のです。今年春東京のあるデパートで開催されたモンゴル展に特別に出品しましたところ，モンゴル大使をはじめ，参観者の驚嘆のまととなった由です。

外観はお世辞にも上等とはいえませんが，本学図書館はこのような貴重書も蔵しており，移転によって建物が最新式になることによってその利用価値も高まるものと期待しています。学内だけでなく，学外者，地域社会にもある程度開かれた，活用できる図書館の実現を心から望みたいと思います。

移転に関連して，機械化その他問題山積の館を去るに当り，職員の方々のこれからの努力を願う次第です。最後になりましたが，館員，学生の皆さんに在任中のお礼を申し上げ，また直接間接にお力添え下さった内外の方々に心から感謝の意を表します。

（前館長，フランス語学科教授）

レニングラードと大学と図書館と

石　田　修　一

1）．レニングラードの地図を拡げてみると，河と運河が町を縦横に切りさいている。その内の最大の河をネヴァ河と称する。この河については，古くから文人たちが詩を詠んでいるのでよく知られているが，そのネヴァ河が市の北西部で小ネヴァ河と大ネヴァ河に分れる辺りに，100ありと言われるレニングラードの島の内最大の島ヴァシリー島がある。ネヴァ河の分岐によって作られた鋭角のこの突端がヴァシリー島の岬と呼ばれ，100年以上の長きに亘って，即ち19世紀初頭まで港として栄えたそうである。その岬から南西に向う大ネヴァ河，即ち大学河岸通りに面して，科学アカデミー動物学博物館，人類学・民族学博物館，科学アカデミー本部に始まって，更にレニングラード大学の建物へと学術機関が続いている。大学河岸通りの周辺には，他に芸術院やプーシキン博物館などもあり，所謂文教地区なのである。

灰色の雲が重々しく垂れこめる冬の季節が始まると同時に，ネヴァの流れは黒味を帯びて鈍重になり，大学河岸通りのたたずまいは何となく物淋しく，呻くが如く，圧しつけられるが如くに感ずる。水ぬるむ春，そして白夜ともなれば，一転して青空と強い陽光に，ネヴァの流れはキラキラと輝き，モーター・ボートが快走し，遊覧船がひっきりなしに行き交う。ネヴァの流れはこんなにも速かったのかと驚くのである。舟遊びをし乍ら眺めると，大学河岸通りの，冬にはあれ程薄汚れて見えた建物も実に色鮮やかに「変身」するから不思議である。

しかし，建物に原色に近い色彩を施すのは，無意識の内にもせよ，恐らくは，パッと明るい春や夏の為ではなくて，暗い冬の残像に浮び上らせる色の筈である。ここで，日本のわび，さび文化のよって来る所以が解る様な気がする。

2）．それはともかく，大学の建物のうち，ネヴァ河畔に直接面しているのが大学本部の建物とそれに並ぶ東洋学部，文学部の緑色の建物である。

現在，大学は13の学部と17,000人以上の学生を擁すると言われているが，日本の大学と同様，タコ足とまでは言わずとも，自然科学系の学部はレニングラード市の郊外ペトロドヴァレーツ（土地の人は旧名でペテルゴフと呼ぶ）に置かれている。行く行くは，わが外大と同様，全学部がペテルゴフへ移転をするらしいが，「いつ迄にか」と聞いても誰も正確には答えてくれなかった。

大ネヴァ河に対して垂直に北へ向って細長く細長くのびた赤レンガの建物が，元ピョートル時代の国家機関である12省，すなわちレニングラード大学の本部のある建物である。パンの山の様に，12の山に分れた屋根をもつこの赤レンガの建物の一階に本部事務局，二階に附属図書館を置いている。図書館の正式名称は，「ゴーリキー記念レニングラード大学学術図書館」という。

ところが，このレニングラード大学は正式には実に長ったらしい名称をもっている。レーニン勲賞，労働赤旗勲賞，ア・ア・ジダーノフ記念レニングラード国立大学（Ленинградский ордена Ленина и ордена трудового красного знамени государственный университет А. А. Жданова）というのである。モスクワ大学も，レーニン勲賞，エム・ヴェ・ロマノーソフ記念モスクワ国立大学（Московский ордена Ленина государственный университет имени М. В. Ломоносова）と長ったらしいが，この類の名称付けは何も大学に限らず，町，工場，地下鉄等にまで及んでいる。勲賞と言えば，祝祭日など，また日常でも，誇り高く上着のポケットや襟一面につけて，得意満面たる老人たち一対独戦の勇士たちだろうをよく見かけたものである。それはともかく，この長い長い枕詞を見て，失礼乍ら，私はしばしば日本の落語の話を想起したものである。

レニングラード大学出版局の発行する書籍には必ずと言ってよい程，本の扉の最上段にこの長い名称が誇り高く掲げられている。1965年頃の同出版局発行の本では「労働赤旗勲賞」の部分は抜けているが，1969年あたりから，この新たな「勲賞」を加えた名称に変っている（正確には何年

からか知らない)。モスクワ大学出版局の本の場合，一部の例外を除いてほとんどの場合，こういう名称は掲げられてはいない。下段に，モスクワ大学出版局，とあるだけである。

3)．さて図書館のことであるが，外国人がゴーリキー図書館や各学部図書室，市内の図書館を利用する場合，パスポートを提示して先に書いた本部建物の一階にある国際学術関係課（通称「外事課」— 対留学生，外国人学者相手の渉外その他を業務とするらしい）へ赴き，各図書館長宛の紹介書を発行してもらう手続が必要である。

外事課を出て図書館のある2階へ上るための階段下には中年の婦人が坐ってチェックをしている（第1の関門)。2階へ上って薄暗い部屋を通ると湿気の臭いに混じって甘い香りがプーンと鼻をつく。館内ビュッフェである。薄暗い部屋をやっと通り抜けると，ああ，かすむが如く，と言えば大げさであるが，約500mの長い長い廊下が本館に向って続いている。この長い廊下の両側には，学者，文人の肖像画や石膏像，書架がずらりと並び，新刊書コーナー，辞書コーナーなどもある。こんな景色を眺め乍ら本館に達すると今度は第2の関門があって，初老の婦人に荷物を預け，図書券などを見せて入室が許されるのである。出て行く時にも，この婦人に借り出した本をリストと共に見せて点検を受ける。私は係の所で紹介書を見せて図書券を発行してもらい，注意を聞かされてやっとカードを調べる。あとは日本と同じく分類番号，著者名，書名などを書いてサインをして係に渡すのであるが，希望の本はすぐには出してくれない。午前中に出せば午后，午后に出せば翌日，土曜に出せば月曜以後になる。

これは，第一には，図書館の本に限らず，すべての本は皆の共同財産であり，皆で共同利用すべきもの，という考え方が徹底している為か，学生たちも教師も個人の蔵書に頼る以上に図書館の本に頼っている，という事情，第二には，ソ連の出版事情などによって，図書館は日常的に実によく利用されている為，本の回転に手間どり，図書館業務が多忙を極めているのか(?)。ともかく，せっかち日本人には気の長すぎる話ではある。

これに関連して言えば，古書店の広告にも「読了の本は他人に譲りましょう」とあり，古本の買取値段は通常新本価格の8割と決っている事が，よほどの珍本の類でない限り，本のかかえ込みを防ぎ，本を読み了ったら他人に譲る，という思想を助けるものとなっている様にも思えた。

最後に，長い名称の大学の図書館の長い廊下と長い手続についてのこの長い話を終るに当って，古書の話については，ナウカ社「窓」('73年6，7号）の本学法橋先生の「ペテルブルグ＝レニングラード古書雑話」に詳しい，事を書き添えておきたい。

1975年7月

（ロシア語学科講師）

書誌学のすすめ
——ドイツ書誌学を中心に——

出口安正

現代の図書館活動で，今日ほど書誌学的発想の重要性を痛感させられる時代はない。日を逐うて増産されてくる情報の洪水の中でそれらを時代順に組織的かつ系統的に取捨選択しグループ分けしてゆくことの必要性を感じないものは誰もない。そしてそれらのプロセスを考えるとき，所謂生情報を何等かの形で整理し，二次資料として再編成していくことの技術的必然性をヒシヒシと身をもって感得しないものはないだろう。そしてこれらの作業は殆んどといってよい程日本の図書館では等閑視されてきているのである。しかもその方法すら考えてもみないし，実行したことすらない。と云ってもわれわれ大学図書館に於てさえもご多聞に洩れず，利用者である研究者も常に二次資料の必要性に身をさらしている。大学図書館員である司書の人達も何事もない顔をして過ごしてきたし，過ごしてゆこうとしているのである。特に学術情報を中心に処理してゆく大学図書館におけるこの無謀さは，否この無能さは，やがて機械化に立ちおくれ，コンピューターから閉め出され，やがては国際的な競争場裡から引き降ろされ，自ら消え去ってゆくべき宿命にさらされていると云うべき状態ではなかろうか。先ず私たちの周囲にある日本語の資料から二次資料を，そして先ず文明国と云はれる西洋語で書かれた文献の二次資料を，そして能うべくんば東洋諸語で書かれている一次資料（生資料）から二次資料へと作業を進めてゆこうではないか。これこそが，図書館人の学問研究に対する遠大な奉仕精神であり，所謂われわれの参考業務（奉仕）の最高最大の精華と云うべきものではないか……。これらの問題を追求してゆくとき，書誌学的発想が，そして書誌学が，われわれの前にその姿を現出してくるのである。一体，書誌学とは如何なるものであろうか。扨てこの辺で書誌を意味する語源を探ってみよう。

広辞苑によれば，〝書誌〟— 図書そのものについて記述したもの，となっており，他の国語辞典によると〝書誌〟— 1．書物の内容，成立，伝来など。2．特定の人，題目についての文献目録。3．書物，となっていて，ほぼ現代的な意味に使われている。また Bibliographie という独語を大独和辞典（相良）で調べてみると Bücherkunde と解釈されていて『文献（書籍）解題，書誌学』という意味と Büchervezeichnis『参考書目，関係書誌』という意味の表示を

二通りの訳語が載せられている。更に Bibliologie という語をみるとやはり Bücherkunde と解釈されていて『書誌学，聖書学』と書かれている。Bibliognosie も概ね同じ意味に使われるようである。英語の biblioyraphy を新英和大辞典(研究社）によって調べてみると『1．書誌学，図書解題，2．書目，関係書誌，参考書一覧，3．書籍学』となっていて完全な訳語となっており，序でに bibliology をみてみると『書籍学，書誌学，(特に)聖書学・聖書文学』と訳されている。この日本語の書誌学を広辞苑で調査すると，(ビヴリオグラフィー)—『図書を研究の対象とする学問，広義には印刷術・製本術・古文書学・文献学・分類学・写真術・書道・筆墨など材料研究までを含む。これに図書並びに図書関係事項の一般事項と，各個の図書・文献についての考証的研究とがある』と解説されていて，別の国語辞典では，書誌学—『書物の著者・成立などについて研究する学問』となっている。長沢規矩也氏は書誌学序説の中で『書誌学の解釈に二義あり，一は図書を対象として，これを科学的に研究する学問で，英国ではこの意味に使い，わが国でもこの意味にとっている。他の一は参考図書の解題で，米国ではこの意味に使い，複数形の bibliographies を前の bibliography に対せしめている。これはその内容から解題学というべきものである…』と述べられていて，書誌学のカテゴリーというか研究範囲を次の通り具体的に述べられている。

図書の定義・範囲，起源，発達。

2．図書の材料，形態（大小，様式)，装訂，附属品。

3．書写，印刷の材料，様式，方法，種類，歴史。

4．内容（的本）の成立（著述，編修，翻訳，図表)，種類，伝来，校訂，存亡。

5．図書の収集，保存，分散等に関する事情，方法，歴史。

6．文庫・図書館の類別，歴史。

7．図書整理の原理，方法，歴史。イ．目録法　ロ．分類法

8．図書を対象とする各種の分業（編修，印刷，製本，出版，売買，貸借など)。

さらに寿岳文章氏は世界大百科事典（平凡社）の中で書誌学を『書物の物質的伝達の経路を細心・周到に調査し研究して，それらの起源・歴史，および本文に関する未解決の諸問題を解明する一科学である』と一応の定義を与えている。

次にドイツ語の Bibliographie という言葉は，ギリシア語の biblion＝Buch（書物）と graphein＝schreiben（書く）の合成語であって既に紀元前5世紀の頃に急に現われ出て，〝書写〟という意味を表わしていたり，又ときには〝書籍に関して書くこと〟を意味していたりした。この意味では，この Bibliographie という言葉は一時的な偏差をもって18世紀頃まで使われてきていた。けれども同時にその意味を変えて，今度は全く一般的に〝書物に関する知識〟を表わすようになってきた。デイドロとダランベールの百科事典は文献解題編集者を〝すべての写本（古文書）の知識と解読（判読）に熟練した人々〟と呼んでいる。

（図書館事務長）

≪紹　介≫　N，ネフスキー：「アイヌ民間伝承」，「西夏言語学」

平　野　　曠

ニコライ・ネフスキー（1892～1938）は本学の前身，大阪外国語学校のロシア語講師であった。氏が「石浜文庫」の石浜純太郎博士と親交があったことは，前号にもみえた。柳田国男は「故郷七十年」(定本柳田国男集別巻第三）のなかで，ネフスキーの日本における功績として，東北地方のオシラ信仰，西夏語の研究，沖縄方言の研究の三つをあげているが，もう一つアイヌ語の研究をつけ加えねばならないと思う。

「アイヌ民間伝承」(**Айнский Фолор**, 1972) は，ネフスキー生誕八十年記念にソ連科学アカデミー東洋学研究所が刊行し，グロムコフスカヤが編集している。174頁の仮装本であるが，ネフスキーが生前に発表したアイヌの歴史，言語にかんする論文と氏が北海道時代に採集した未発表の民間伝承の原文，それのロシア語訳などが収められている。

氏のアイヌ語学について，石浜純太郎博士が当時，「その研究方法は全く新しく，集めた資料は金田一教授に次ぐもの」とソ連の東洋学者アレクセーエフへの手紙のなかで述べたと序文にある。

しかしネフスキーの主著は，何といっても「西夏言語学」二巻(**Тангутская Филология**, 1960) である。死後に出版されたこの書に，ソ連政府はレーニン賞を与えた。未発表の論文を含め，すでに日本語，英語で発表されたものはロシア語の翻訳を載せている。

ネフスキーと西夏語との関わりは，大阪在住中，石浜博士の知遇をえてからで，1926年頃から西夏語にかんする論文を諸雑誌に掲載している。それらは本館の「石浜文庫」に所蔵されている筈である。また生誕七十年記念には，「西夏語写本翻訳」(**Тангутские рукописи и ксилографы**, 1963) がでている。

ネフスキーについて，多くを語る紙面をもたないが，教室ではきびしいロシア語の先生であった。日本語は日本人以上に流暢だったが，その先生さえ「日本に来て，はじめて日本語を使ったところ通じなくて，情けなかった」そうである。身につまされる話だが，もって語学の徒の励みとしたい。

先年来館したレニングラード大学日本語科主任ピヌス女史は，ネフスキーから日本語をならったときいた。

ネフスキーの伝記は，「月と不死」(東洋文庫）の中の加藤九祚氏の解説に詳しい。　（附属図書館第二運用係員）

石浜文庫について
——その整理計画を通して——

布川嘉佑

本学の移転は昭和53年4月までに完了する予定であり，図書館の移転はそれより早く，昭和52年に完了することになる。その際，新しい図書館で石浜文庫がどの様に利用されていくのか，又現在整理中の石浜文庫がそれまでにどの様に整理されることになるのかといった問題について，その整理計画を通し少し言及してみたい。

石浜文庫の概要については前号で詳しく説明されており，その資料のもつ意義等について今更ふれることもない。ここではその整理計画を披露して学内外の方々の協力と理解を得たいと考える次第である。

現在までの整理の状況については，前号でもふれておいたので，今後移転までの処置として計画されるものをとり上げたい。

石浜文庫に限らず貴重な文献資料の整理には二つの大きな目的がある。一つはその Originality の保持であり，一つはその利用である。石浜文庫の Originality の保持については，　在学内予算年間 170万円程度の費用（この際，人件費がそ　半分を占める）で整理中である。しかし移転までにこれらの保持（破損本の補修，製帙，拓本の裏打ち，マイクロ化など）は現状のような予算処置ではとても終りそうになく，別途予算による早期の解決策が必要である。しかも移転に伴う資料の散逸，破損を考えると身を切られる思いである。例えば洋書の約 3,000点のほとんどが長い年月を経た貴重本であり，1500年～1700年までの図書は手にふれるだけで装幀がくずれるものも少なくない。特にロシア語で書かれたモンゴル関係の仮綴本にいたっては，その処置を急がねばならないであろう。これに限らずこの種のものは漢籍の中にも多くみられ，製帙とそれに併行して紙魚による虫喰い本のマイクロ化も急がねばならない。

次にこの文庫で一番頭を痛めるのが經本と拓本である。經本は蒙古語，西藏語，梵語，西夏語等で書かれた仏典でその数は約 200点になり，一部は竹冊本の様な貴重なものもあり，その補修とマイクロ化はぜひ進めなければならないものである。しかもこれらが他の機関で所蔵しないものであるだけに，なおさら重要である。拓本についてはその数は約370 点にのぼるが，それの Microfiche 化は一応終えた段階である。ただこれの整理（目録カード化，Microfiche の利用）など未処理の状態にある。更にこの拓本の裏打ちは，特に年月が 200年以上も経過し，その保存が完全でなかった等の理由で，その処置は緊急を要するものである。特に漢，満，蔵，蒙，梵，西夏の六体の合璧，漢，蔵蒙，西夏の四体の合璧は20㎡ をこえる大型拓本でその処置が重要である。以上經本と拓本についてふれたがこれらが石浜文庫の心臓ともいうべき重要な Collection であり，金がかかることとあわせて，その処置を急がねばならないものである。

次に前号でもふれておいたが，雑誌，抜刷の整理と製本がある。整理と併行して製本がなされねばならないが，予算の関係で放置されたままで；その数も製本だけで 3,000冊を超え，移転による散逸を考えると，このままにしておけないものである。特に中国語をはじめとする東洋関係の学術雑誌は斯界でも羨望の的であり，学術雑誌総合目録の人文科学和文編1973年版にほとんど所蔵しない雑誌が創刊号より揃っていることである。洋雑誌については，東洋学関係の雑誌が比較的古いものから存在するが，この製本処置のあと，Lack の穴埋め，新しいものの継続的購入処置が今後の課題となる。挟刷については特にロシア語で書かれたシベリア，サハリン（樺太），満州，西域などを取扱った文献（特に1850～1910年位までの）が 1,000点以上を数え，それの整理を急がねばならない。その他書翰類の整理，写真等の資料の整理が未処理であるが，その中にN．ネブスキー等の貴重な手紙が数点存在している。

以上，これら文献の Originality の保持を中心としてその一端を記したが，次に蔵書目録を中心とした利用についてふれてみたい。

蔵書目録に先行するものとして，昭和45年3月に受入れた図書類約28,000冊については，石浜文庫仮目録として一部学内教官を中心に利用されている。更に雑誌，拓本等の他の残りの部分については，その所在目録のNo.2 が作成されている。更に前述した雑誌の整理による目録カードがあるので，利用については經本，拓本の一部を除いてほぼ問題はない。ただこれらについて正規の蔵書目録を作成し，広く学会にその利用の手懸を与えることが重要になる。現状の様に本学の一部のみにこれら貴重な文献を利用させることが本意ではないはずである。蔵書目録については，仮

石浜文庫所要額

移転時昭和52年度までの整理費 （但し昭和50年度分は除く）	**19,210,000**
A．補　修　費	
1．製本費	3,705,000
2．　〃　（新聞等）	225,000
3．製帙費	400,000
4．拓本裏打（大型）	480,000
〃　（中型）	1,400,000
5．マイクロ費	600,000
6．備品費	1,500,000
小　計	**8,310,000**
B．石浜文庫蔵書目録	**8,000,000**
C．人　件　費	**2,000,000**
D．謝金（特殊資料処理）	**400,000**
E．そ　の　他	**500,000**

目録のカードの修正を大半終え，予算がつきさえすれば石浜文庫蔵書目録の作成が可能となる状態である。これらの目録の作成には特殊文庫資料整理費の様な型で特別予算の配分を受け得ないものであろうか。

最後に学内利用について若干の機械設備の充実が必要となる。貴重文献等についてはマイクロ化を進め，Microficheも相当数あるが，それをマイクロリーダプリンターにかけて即時に教官各位に利用させる体制になっていない状態である。本学の図書館は図書等の文献の購入にはかなり積極的であったが，設備等については本学が狭隘であったことなどの理由で後手になっていたきらいがある。これらも早く解決することが重要であり，マイクロなどの文献をもちながらそれの利用が出来ないことは，はなはだ残念である。

特殊文庫処理規定について

本学には石浜文庫をはじめ歌島文庫など貴重書類が多く，それの処理をめぐって今後種々問題が起こることも考えられます故，昨年7月の教授会で承認されました特殊文庫処理規定を紹介します。

大阪外国語大学附属図書館
特殊文庫運営委員会規程

（趣　旨）

第1条　大阪外国語大学附属図書館に特殊文庫の収集，整理，保存並びに利用に関する事項を審議するため，当該文庫ごとに特殊文庫運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（組　織）

第2条　委員会は，次の委員をもって組織する。

1．図書館長

2．図書委員会委員長

3．図書館長の推薦により学長が委嘱する教官若干名

（運　営）

第3条　図書館長は委員長となり，委員会を招集し，その議長となる。

2　委員長に事故あるときは，委員長の指名する者がその職務を代行する。

第4条　委員長が必要と認めるときは，委員会の同意を得て委員以外の者を委員会に出席させることができる。ただし，議決には加わらない。

第5条　委員会は，過半数の委員の出席により成立する。

（解　散）

第6条　委員会は，第1条の任務が終了したとき解散する。

（庶　務）

第7条　委員会に関する事務は，附属図書館において処理する。

附　則

この規程は，昭和50年　月　日から施行する。

外国雑誌の予約について

昭和51年度外国雑誌の予約がおわりましたので，一応そのまとめの結果を報告すると共にその問題点をあげてみたいと思います。本年度の外国雑誌の予約件数は 380件で，その出版地別内訳は別表1の通りとなります。

表1

	件数	%		件数	%
英　国	51	13.4	スエーデン	4	1.1
アメリカ	99	26.1	フィンランド	1	0.2
ドイツ	39	10.3	メキシコ	2	0.5
フランス	24	6.3	ニュージランド	1	0.2
ロシア	61	16.2	オーストラリア	1	0.2
スペイン	18	4.7	パキスタン	6	1.6
デンマーク	12	3.2	インド	12	3.2
ハンガリー	22	5.8	インドネシア	2	0.5
東ドイツ	8	2.1	ビルマ	6	1.6
カナダ	1	0.2	ペルシァ	2	0.6
ベルギー	1	0.2	タイ	1	0.2
ルーマニア	2	0.5	香　港	1	0.2
ポーランド	3	0.7			

これをみますと，全予約雑誌の中英・米・独・仏・露で全体の73.4%を占め，他の西洋関係では18.5%，アジア関係は 8.1%の比率となっています。これは，結果的には全予約雑誌の中，西洋関係の雑誌が全体で91.9%を占めていることになりますが，本学の場合，必ずしもこうした傾向があるわけではなく，アジア系学科の中では，取扱業者では入手不能か取扱わないケースが多く，研究者の方からも半ばあきらめて order しない場合が多いと考えられます。東南アジアの雑誌は，小額誌で，また為替問題など国情による事情が関連していることが多く，将来直接購入の途を開かなければ資料の収集が不可能となることになります。本学の場合，インドなど一部の図書の購入には，直接出版者へ order による方法で購入をしていますが，これは現在まで事故も少なく，結果的にはかなり有利に資料の入手ができることになります。ただ支払については，国の予算執行の方法など制約が多く，為替制度の問題など解決せねばならぬ問題が残されています。

次に，予約誌の中で前金払にまわされた件数をみますと299点で全体の78.7%を占めています。その内訳は表2のとおりとなります。

これでみますと，前金払のうち英・米・独・仏・露・スペイン・デンマークで 280誌となり，全体の93.6%を占め，これ以外の雑誌は後払いか入手困難かのいずれかになることになります。これは12月現在の予約時の集計ですし，今

表2　各国別前払誌件数及び対全予約誌百分率

	件数	%		件数	%
英　国	48	94	デンマーク	9	75
アメリカ	94	94	ハンガリー	12	54
ドイツ	38	97	東ドイツ	4	50
フランス	22	91	ポーランド	1	33
ロシア	59	96	インド	1	16
スペイン	10	55	香　港	1	100

年度限りのデータによるもので，その根拠はうすく，断定はしかねますが，おおむねこの様な傾向にあります。

次に，前金払誌 299誌の内金額別による誌数をみますと表3のようになります。

表3

金　額	件数	金　額	件教
100,000以上	1	20,000以上	11
80,000 〃	3	15,000 〃	27
50,000 〃	0	10,000 〃	65
40,000 〃	2	5,000 〃	117
350000 〃	3	5,000以下	54
30,000 〃	9	2,000 〃	4
25,000 〃	3	合　計	299

（金額単位：円）

これによりますと，5,000円～10,000円以下の雑誌が39.1%で，10,000円～15,000円以上が27.1%，5,000円以下が18%となり，この3種で78.8%を占めます。逆に高額誌，例えば40,000円以上では2%で，小額誌が非常に多く，自然系の大学と比べて金額の点では小額になります。

本学の場合，229点の前金払誌についていいますと取扱業者は8社で，一番多いA社が82点，B社が75点で，最少はC社12点，D社17点の様な状況であります。

これでみてもわかるとおり，本学は取扱い金額が小額の割に業者が8社と比較的多く，また一社当たりの取扱件数も少なく，小額誌が多いという状況になっています。

この他，中国雑誌，朝鮮語の雑誌などありますが，これらは後払いとなっております。ロシア語の雑誌の中にはモンゴル関係のものも少なくなく，内容もかなり広範囲にわたるのですが，これは今回は割愛します。

編集後記

第3号の原稿を早くからいただいておりましたが，館内の事情から発行が遅れ，申し訳けなく思っています。次いで第4号を出す予定でありますが，図書館に関する御意見や御要望がありましたらどしどしお出し下されば幸甚です。

（編集子）

――入館者数調査――

昨年の10月に久しぶりで入館者数の調査をしました。試験やその他の行事が何もないウイークデーの朝9時から夜8時迄の入館者数を調べました。年間入館者数の報告は毎年文部省などに統計報告として提出しているのですが，学内では案外知られていないのではないかと思い，又移転地の新図書館計画の参考にでもなればと思います。

さて，10月25日の入館者数は延741人でした。前回の調査の時が878人でしたから，100人余り少なかったのですが，平均1日の入館者数を700～800名と判断していたので予想通りでした。今，ちょうど期末試験の最中で，図書館は連日満席の状態です。試験中の入館者数は今年は調査していませんが，過去3回程の調査によると9時から夜8時迄に約1,200名が入館しています。閲覧室内，わずか164席に時間帯が異なるとはいえよく入れるものだと思います

次に昨年の調査による時間別の入館者をあげてみます。

時間帯	入館者	時間帯	入館者
9時～10時	33名	3時～4時	47名
10時～11時	63名	4時～5時	40名
11時～12時	49名	5時～6時	49名
12時～1時	168名	6時～7時	17名
1時～2時	107名	7時～8時	19名
2時～3時	149名		

上表でわかるように，入館者のピークは12時～1時迄の168名，次が2時～3時迄の149名，1時～2時の107名，の順で，最低は6～7時迄の17名，次が7時～8時迄の19名名となります。この順位は過去の調査時と殆ど変わりません。

大阪外国語大学附属図書館館報

発行　附属図書館

No. 3　1975. 11

大阪市天王寺区上本町8丁目
電話　(06) 772－1271

印刷　セイエイ
大阪市城東区蒲生町2－1